

29amD-091

大草胃腸薬のスナネズミにおける *H.pylori* 惹起胃炎に対する保護作用
○天ヶ瀬 紀久子¹, 村上 季子¹, 木下 直也¹, 幸重 徹¹, 和田 彬光¹,
竹内 孝治¹(¹京都薬大・薬物治療)

【目的】*Helicobacter pylori* (HP)が胃炎、胃・十二指腸潰瘍、さらには胃癌などの発症において病因的に作用することが明らかとなり、除菌療法が最も有用ではあるものの、一次および二次除菌療法では耐性菌の出現により除菌できない症例があることや、抗生物質による副作用の問題、薬価など、除菌療法にも多くの問題点が指摘されている。大草胃腸薬は、健胃作用のある生薬を主剤とし、消化を助ける胆汁エキス、ならびに胃酸中和作用をもつ沈降炭酸カルシウム・ケイ酸マグネシウムを加えた総合胃腸薬である。本研究では、スナネズミにおける HP 惹起胃炎において、大草胃腸薬が保護作用を示すか否かを検討した。【方法】HP は、TN2GF4 株を使用した。18 時間絶食した雄性スナネズミ (7 週齢) に、液体培養した HP (2x10⁸CFU、0.5ml) を経口接種した。接種 3 日後より、大草胃腸薬(100~1000 mg/kg)あるいはベルベリン 0.3 mg/kg を 1 日 2 回 4 週間、連続経口投与した。投与終了後、胃粘膜病変の面積 (出血、充血、浮腫)、胃内 HP 生菌数ならびに MPO 活性を測定した。【結果】HP の経口接種 4 週間後の胃体部には、浮腫、充血、出血などの明らかな粘膜傷害が認められた。また組織学的検討から、上皮の剥離や胃粘膜内に好中球を主とする炎症性細胞の浸潤が強く認められ、一部、腸上皮化生、リンパ球浸潤も観察された。大草胃腸薬 1000 mg/kg の 4 週間連続投与は、HP 感染による肉眼的な病的変化を有意に抑制した。一方、ベルベリンは胃炎の程度を抑制する傾向が認められた。また、胃内 HP 生菌数は、大草胃腸薬あるいはベルベリンの投与により、対照群と比較して明らかに抑制しており、MPO 活性は低下する傾向が認められた。【結論】HP により惹起された胃炎に対し、大草胃腸薬の連続投与は保護作用を示す可能性が示唆された。